
デジタリアン

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジタルアン

【Nコード】

N6088Q

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

映像ディレクターのアンナは、デジタルアーティストのレジスタと「不思議な声」の下に出会い、結び付きを強くしていく。そしてオールド・オーディオマニアの木下正平とその娘でピアノを弾く佐登子も「不思議な声」の下で突き動かされていく。両者の違いはデジタルとアナログ。両者は否応無しにデジタルとアナログの対立に巻き込まれていくのだった。最後に残るのは、デジタルか、アナログか、はたまた……。

プロローグ（前書き）

新作で思い悩んだ末、執筆中断していたストック小説を再開すること。

納得できるエンディングで書き切ることを目指して執筆に勤しみま
すです、はい。

プロローグ

一

あたしは、ひとりの画家に出会った。

その画家の名前は「レジスタ」という、新進気鋭、売り出し中の芸術家であったが、彼はまだ十七歳の少年だった。

彼のジャンルは抽象画から写実画、人物画から風景画まで、実に多岐に渡っている。彼の描く絵画は大胆でありながら緻密であり、ダイナミックな動きの中にも静寂がある。彼の絵の中には、例えばうのない、不思議な魅力とパワーがある。

それは、どの絵にも彼独特の「哲学」が存在しているからと言われている。その哲学は、プロセスの段階の問題であり「絵を描く」というのは、彼にとっては最終段階の「行為」にしか過ぎないという。

調べれば調べる程、彼のことに興味をそそられ、その全容に驚きを隠せなかった。そして、その衝動はテレビプログラムディレクターのあたしに、彼のドキュメンタリープログラム制作の企画書を書かせるに至ったのである。

そして意外だったが、彼はあたしのオファーを快く承諾してくれた。

二

取材当日、彼は自分のアトリエにあたしを招き入れてくれた。

ガランとしたそのアトリエは、北側の大きな窓から光があふれていた。白塗りの内壁には一枚の絵も掛けられていない。また、モノもほとんど置かれていない。アトリエの中央に大きなテーブルがあり、その上に躯体の大きなコンピュータと五十インチのモニタが鎮

座していた。

あたしは、ちょっとビックリした。画材の類は一切ないのだ。もちろん、最近の芸術家は絵筆を持たず、コンピュータのデバイスで絵を描いたりするので、それには驚かない。しかし、普通ならその前段階においてアイディアを具象するにはスケッチブックやペンなどの画材が必要だ。ところが、彼のアトリエのどこにもそんなものは存在しなかったのだ。

さらに、コンピュータに接続されたデバイスはキーボードのみで、マウスさえない。彼は、明らかにコンピュータで絵を描いていると思われるのだが、どう描いているか、全く想像が出来なかった。

「よく言われるんです。何もないのでよく絵が描けるなって」

彼は、口の端に笑みを浮かべて、あたしが思っていることに先回りして答えてくれた。

「僕の絵のビジョンは頭の中にある。だけど、それは極彩色のものじゃない。具体的なカタチをイメージしていないんだ」

あたしは、彼の言葉に少し首を傾げた。

不思議そうになっているあたしの顔を覗き込んで、彼は優しく笑った。

「数字なんですよ。具体的に言うと、数式とプログラムなんだ」

それでも、あたしは理解できていなかった。

「あるイメージを想像すると、それが数字で現れるんです。それをコンピュータに入力する。すると一枚の絵になる。それだけのことなんです」

あたしは、この説明で輪郭が分かった。

彼は頭の中に湧き出てきた、数字や数式、プログラムをコーディング、もしくはアセンブルしたものをコンピュータに入力するのだそうだ。

彼にとって必要なのはコンピュータであり、これが絵を描く道具であり、彼の絵を具体化するスケッチブックの代わりなのだ、ということだけは理解できた。

彼の、そのアトリエでの作品の制作方法は、常人では真似できないものだった。

彼は、具体的なイメージを創造しないまま、コンピュータを唯一の道具として用い、直接、数字を入力して芸術を成す。最終的な作品としての「絵」となるのは、彼がプログラムを起動させる時なのだ。

彼の作品が現れるのは、モニタであったり、プリンタからの出力だったり、あるいはネットワーク上でブラウズされたり、目に触れる表現方法はいろいろだ。

そして、彼は一旦生成したものは、二度と訂正や修正はしないという。それに、彼のプログラムとデータは改ざん出来るような隙がない。そんな訳で、ウィルスやスパム、スパイが横行するコンピュータの世界において、彼の作品をハックした者は未だにいない。

「僕は決して考えている訳じゃない。感じているんだ、素晴らしい何か」から。そこから流れてくるモノが数字なんだ」

彼は屈託のない笑顔をあたしに向けて、情熱的に話してくれた。

彼の作品から感じる、冷静で論理的な、いわゆる哲学っぽさとは対照的だった。

「哲学的？ 評論してくれる人達は良くその言葉を使うね。僕自身、そのことについてはよく解らないんだ。哲学なんて勉強していないから」

彼は戸惑いの表情を見せた。

宙を見つめて少し考えた後に、あたしの目を見て、こう言った。

「ただ言えるのは、哲学じゃないんだ。数字なんだよ。他の人にとつては単なる数字だけど、僕にとってはとても楽しい、愉快で爽快で、嬉々とした数字なんだ」

彼の目の奥で何かが輝いた。あたしは、そんな風に感じた。

四

「気分がいいから」というので、彼はあたしに制作風景を撮影させてくれた。

彼は、アトリエの中央にあるテーブルの、コンピュータとモニタの前に座り、キーボードに手を置いた。そして目をつむって、しばらくじっとしていた。その姿は、僧侶が瞑想しているようにも見え、崇高な空気感を漂わせていた。

やがて、彼は目を見開いてモニタを見詰め、激しくキーボードを叩き始めた。恐ろしい速さで文字と数字が打ち込まれてゆく。入力されたデータは、瞬時にモニタに現れ、目にも止まらぬ速さでスクロールされてゆく。

十数分間、その状態が続いた後、彼は、打ち込んだデータとプログラムをメディアにセーブした。そして、ゆっくりとこちらを向いて、ニコツと笑った。

「小さな作品だけど、出来たよ。貴女の望む方法で作品を表したいな」

そう言って、照れ臭そうに下を向いた。

あたしは、突然の進言にたじろいだ。しかし、迷うことなくこう答えた。

「みんなが鑑賞できるといいわ。だから、ネットで公開して」

彼は、あたしの言葉に嬉々とした。

「僕もそう思っていたんだ」

そう言い終らないうちに、彼は作業をした。その作業は、三十秒も掛からなかった。

「これで完成だ。ここではネットブラウズできないから、家に帰って見てよね」

まるで子どものような彼だった。その屈託の無さにあたしは感動すら覚えた。

「ええ、分かったわ」

取材の継続を依頼すると、彼は快諾してくれた。

「貴女の取材なら、いつでもどうぞ」

あたしは、営業用の笑顔を彼に向けていた。そして、今日の取材を終えた。

五

あたしは帰宅してくつろぐまで、彼の作品、新進気鋭の芸術家「レジスタ」の、取材の時に制作した小作品のことをすっかり忘れていた。

早速、サーチしてみた。キーワードは「レジスタ」と「新作」と、そして、今日の日付。

「一件、該当しました」

パーソナルターミナル（以下、PT）が軽やかに告げた。

あたしは、PTに指示を出した。

「PT、ブラウズして」

彼の作品をブラウザで見て、あたしはビックリした。そこには、あたしの姿があったからだ！

笑っている、泣いている、怒っている、様々な、あたしの表情。そしていろんな、あたしのポーズ。自分でも知らなかった、あたしの姿。それが幾重にも重なって、美しいハーモニーを見せていた。ある時は淡く、ある時は濃く、あたしの画像が止め処なく表れていた。

「どうやって、あたしの映像を？ しかも、こんなに大量に？」

あたし自身、こんなに撮られた記憶がない。しかも、過去の写真でもない。しかし、この映像は紛れもなく、今のあたしの姿なのだ。あのアトリエで隠し撮りされたのか？ …いや、そんなものはない。当たらない。例えばそうだったとしても、様々なアングルの映像がある。こんなにたくさんカメラがあったとは、到底考えられない。

い。

あたしには、さっぱり訳が分からなかった。

「これって、どういうこと？」

ホログラムの映像に触れようとした時、インタラクティブに反応した。

『アイ、ラブ、ユー』

それはイメージとして流れてきた。それは、緩い倍音の中で、かすかに聞き取れるサウンドとして。そして、淡くてビビッドな組み合わせの中で、かすかに読み取れるカラーとして。

「あたしのことが好きだって?!」

あたしは更に驚いた。

あたしにそんなつもりは全く無い。あたしにとって彼は、単なる取材対象であり、知的好奇心をくすぐられる存在ではあるが、あたしのプライベートとは関係ない。

ぼんやり考えていたその時、PTが警告をコールした。

「メールを大量受信中」

「オーバーフローを警告」

「現在、サーバにメールが待機中」

「スパム処理、オーバーフロー」

あたしはパニックに陥った。

六

「どうなってるって言うのよ!」

PTは静かに言った。

「メールの速やかな開封を」

画面にあふれかえるメールのリスト。そのリストをいつもの優先順位でソートした。

プロデューサーのメールから開封した。

「おいおい、困るよ、仕事にプライベートを持ち込んで! きち

つと仕事はしてくれたまえ」

一番の親友のエリカからのメール。

「一番ホットな人と付き合ってたなんて。一言そう言ってくれれば、あなたも人が悪いわね」

同僚のメール。

「フェイマスな彼とアツアツだったとは。おやおや、隅に置けないねー」

後はランダムにメールを開封した。

「あなた、レジスタ様の何なのよ！」

「レジスタ様の告白の相手は、私のはずなのに！」

「君は、レジスタの恋人として正当なのか？」

スパムシステムがダウンしたので、全てのメールが流れ込んでいるようだ。

「PT、全てのメールを削除。アドレスを停止して」

PTは静かに報告した。

「アドレス停止」

「全メール削除、完了」

「サーバ、正常運用」

あたしはうんざりした。

彼「レジスタ」は、今最も有名な芸術家である。

彼の新作が出たことをファンがサーチし、その作品があたしだったことに対して、あらゆる意見がメールとして、あたしのところに届いたのだ。

あたしにはそんなつもりは毛頭無い。

そして、彼に対して恋愛感情なんて持っていない。だいたい、今日初めて顔を合わせたのだ。恋愛はネットのプロフで解るようなものではない。

だが、レジスタはそうではなかった。あたしに対して、恋心を持ったのだ。いわゆる「一目惚れ」なのだろう。

「……こんなことになるなんて」

いくら考えてもどうにもならない。
考えるのを止めて、ベッドに潜り込んだ。
だが、いつまでも眠れない夜だった。

七

翌朝、カーテンを開いて見ると、頭が痛くなった。
マンションの前にマスコミが、列を成して待ち構えていた。
あたしは会社にコールした。

「あ、あたしです。……ええ、そうです。その通りなんです。とても会社に行けそうでは、……はい、……はい、申し訳ありません……」

会社と上司、そしてプロデューサーは事情を分かってくれたようなのだが、快い感じではなかった。

不快感を覚えながらも、あたしは仕事に対する意欲を減じていなかった。ので、仕事をする手段だけは何とか確保したかった。

「PT、会社にアクセス」

オンラインで仕事をするしかない。だが、PTは警告を発した。

「回線盗聴の兆し有り」

「アクセスを中止」

あたしは、テーブルを叩いた。

「あたしが、何をしたって言うのよ!」

八方塞がりだった。

だが、この八方塞がりが如何に理不尽であるかを、あたしは発言することも出来なかった。

昼近くまで、あたしは何をすることもなく、クシャクシャの紙くずのような風体で、ソファの上でボンヤリしていた。

空腹があたしに考える力を取り戻させた。

「そうだわ、昨日の取材が発端なのよ」

新進気鋭の芸術家であるレジスタ、彼があたしの前で即興に作っ

てみせた小作品。

それが、あたしへのオマージュであり、愛情だった。

彼の思いは、一方的だった。

いや、彼はあたしに降り掛かる事態など、想像していなかったのかもしれない。

逆に、解っていてこうしたとも言える。

もし、そうなら……。

それならそうで、あたしにも考えがあるわ。

彼の勘違いだと分かっているが、仕事にそれを使わない手は無い。

「精々利用させてもらうわ」

あたしはスーツに着替えて、マンションを出た。

群がるマイクや容赦ないレポーターの質問をかくぐって、タクシーに乗った。

八

あたしは、雑念を取り払おうと努力した。そして、どう事を進めたらいいかを考えた。

『彼は、あたしに興味を持っている』

『あたしは、それを利用して、彼に近づく』

『そして、彼の取材への取材を独占できる』

『このドキュメンタリーが、あたしを成功へ導く』

これがあたしの目論見だ。

そう思いながら、タクシードライバーに彼のアトリエへの道案内をしていた。

ずい分スムーズに進んでゆく。

昨日の取材では、この道は慢性的な渋滞だったのに。

あたしは、彼のアトリエの前にいた。

彼のアトリエは、シーンと静まり返っていた。

「おかしいわ」

全くマスコミどころか、パパラッチさえもない。

それに、昨日来た時のセキュリティは厳重だったが、今日は素通りなのだ。

彼の術中にはまっている気がしたが、そんなことはある程度予想していたことだ。

あたしは、おもむろに呼び鈴を鳴らした。

二回ほど、立て続けに鳴らした。

彼は、にこやかに笑って出てきた。

「そんなに鳴らさなくても大丈夫だよ。もう、次の取材？ それとも打ち合わせ？」

彼が演技をしているようには思えなかった。

最初に会った時の屈託の無さは変わっていなかった。

「あ、うーん、いえ、そうじゃないの」

あたしがモジモジしていると、彼はあたしをアトリエの中へ招き入れてくれた。

「立ち話は何だから、家に入ってよ」

「……そうさせてもらっわ」

あたしは、彼の屈託の無さに戸惑いを覚えた。だから、彼が何を考えているか、あたしには解らなかった。

「ところで、あなたは知ってるの？」

あたしは、正直に尋ねてみた。

ところが、彼はキョトンとしたままだった。

「え？ 知ってるって、何を？」

彼はホントに戸惑っていた。

あたしは、彼に事実を話した。

「あなたの作品が世間を騒がせてるのよ」

彼は平然と答えた。

「いつもそうだけ」

あたしは、髪を掻揚げながら言った。

「そうじゃなくて！ あなたが昨日、あたしの目の前で作った小作

品で、あたしが大変なのよ！　あたしは、あなたの恋人とかわれるのよ」

彼は、ビックリした表情で答えた。

「え？　なに？　どういうこと？　なにが、どうなって、こうなって……、えー、解らないよー」

彼は、目を見開いて髪を掻きむしった。

九

「あたしは、あなたの恋人だと思われてるのよ」

彼は、ビックリした表情で答えた。

「え？　なに？　どういうこと？」

彼は、目を見開いて髪を掻きむしった。

あたしは、彼の両腕をつかんで言った。

「あなた、自分の作品の内容、分かってるの？　あれは愛の告白だと、みんなが思っているのよ」

彼は、放心していた。

「そ、そんな……」

彼はうなだれて、床にへたり込んでしまった。

「確かに、僕は貴女に好意を持った。だから、貴女のことを考えながら描いた。だけど『愛の告白』だなんて……」

彼は泣き出してしまった。

うなだれて、頭を床に擦り付けながら泣いている彼を見ると、あたしまで、訳が解らなくなってきた。

何かがおかしい。

あたしは、あることに気が付いて、彼に尋ねた。

「あなたのマネージャーはどうしたの？」

彼は嗚咽しながら言った。

「誰なの、それ？」

あたしはビックリした。

確か、あたしは取材のために事務所に連絡を入れ、マネージャーと交渉したのだ。

そのマネージャーが居ない、だって？

だが、居ないのなら納得出来ることがある。

マネージャーならこの騒ぎに対して、あたしに抗議をするだろう。更に、あたしがこのアトリエに来ることを阻止するはずだ。

両方とも何も無かったのだ。

彼を誰も管理していない、だが、彼は管理されてない訳ではない。不可解な思いだった。

宛てどもなく考えていた時、彼は急に飛び起きて、あたしに言った。

「外へ出ちゃいけないよ。大変なことになるって。そう言っているよ」

あたしはキョトンとした。

「え？」

そして、彼に怪訝な顔で尋ねた。

「一体、誰がそんなことを言っているの？」

彼は、宙を見たまま答えた。

「解らない。だけど、そう言っているんだ！」

あたしは、狐に化かされているとしか思えなかった。

十

だが、あたしはなぜか、彼の言うことは嘘ではないと感じていた。そう感じた理由は、特にない。あえて言うなら「彼を信じた」という感じだった。

やがて、あれだけ晴れていた空がにわかには曇だし、やがて街を黒く覆った。そして大粒の雨が降り出し、土砂降りになった。

彼はどうしたかという、雨が降り出してからは、部屋の隅で座ってぼーっとして、そして宙をじーっと見詰めていた。

やがて、空がフラッシュライトのように光り、光の柱が網膜に残像を残すほどの稲妻が走った。そして、直ぐに大音響が響いた。

「ギャー！」

彼は大きな悲鳴を上げて、手で頭を押さえてうずくまり、ブルブルと震えていた。

「大丈夫？　しっかりしてよ、高々雷じゃない」

あたしはそう言いながら静かに彼に近寄って、彼の背中を撫でた。その時だった。

不思議な声が、何処からとも無く聞こえてきた。

周りを見回したが、当然何も無かった。

だが、彼に触れるとなぜか、明瞭に聞こえた。

「我は司る者なり。我を恐れるな。我を信ぜよ。そして我に従え。されば、望みのままであろう」

不思議な声だったが、恐怖を感じなかった。

どことなく懐かしい優しさだった。

あたしは、おずおずと尋ねた。

「あなたは誰？」

不思議な声は、よどみなく発声した。

「我は司る者なり。そなたは解せる者。そして、彼は伝える者」

あたしは、フンと笑って言った。

「あたしは、宗教なんて大嫌いよ。何を布教するって言うのよ！」

不思議な声は、静かに柔らかく発声した。

「我の……を」

ブローグ（後書き）

ここまでが執筆中断分で、今後につなげる為に再推敲しました。
これ以降が新規執筆分となります。
乞うご期待！

アナザー・プロローグ

一

大きなスピーカが取り付けられた黒い大きな箱が、その部屋の四隅に鎮座していた。その上には更に小さいスピーカーボックスが、親子亀のように乗せられていた。

そして部屋の正面側の壁面には白いスクリーンがあり、そのスクリーンの下にも更に大きい重低音用のスピーカーが取り付けられた黒い箱が設置されていた。

部屋の前面より中央には、それらのスピーカーを駆動するアンプ類、そのアンプに信号を流し込む、大きなインシュレーターを取り付けられた「ターンテーブル」がライトグレーのコンクリートブロックの上に乘せられていた。

部屋の中は、落ち着いてじっくりと音楽を聴くことが出来るように、部屋の照明は暗めに調整されていた。照度を落とされた白熱電球色の間接照明が、壁面に使用したチーク材の黄色を更に濃い黄土色に変色させていた。

私は、この部屋の中央やや奥にある、少し柔らかいクッションのリスニングチェアにゆったりと身を沈めて、ターンテーブルに乗せられた「ベートーヴェン・交響曲第5番」のレコードからピクアップされ、チューブ・アンプで増幅された美しい音色に聴き入っていた。

二

この部屋は、私が構築した「オーディオ・ルーム」だ。それなりの金をかけて構築したが、私の究極の音響を実現しているという訳ではない。もっと金をかければ、私の理想に近づくかもしれない。

だが、私は湯水のように金を持っている訳ではない。しがたい普通のサラリーマンで、しかももう間もなく定年を迎えようとしているような人間なのだから。

しかし、所詮は音楽や音の再生装置だ。機械である。やはり限界がある。

私は、非常にお金持ちのオーディオ・マニアと、ある時期非常に懇意になったことがある。彼の再生装置に対する美意識が、その頃の私の思想と同調し、意気投合したのである。

彼は確かにオーディオについては博学で知識は豊富だったし、潤沢な資金を背景にして「モノ」を買い漁り「モノ」に対する知識や経験は尋常ではなかった。しかし残念なことに、彼の耳は非常に悪かった。そして、良し悪しを判断するだけの感覚も持ち合わせていなかった。

そんな彼を私は利用した。彼は私に絶大な信頼を置いてくれて、オーディオルームの設計から機材の選定までを全て任せてくれた。私は、彼の資金をバックに私の音の理想を追い求めた。

部屋の基礎は二メートル以上の厚さで施工し、防音壁を二十センチメートル以上で造作し、定電圧回路をいくつも組み込んだ最高の電源でドライブし、最高のアンプを組み合わせ、ターンテーブルを部品からアッセンブリし、ケーブルを何度も取り替えた。

そして、いつまでも経っても完成しないオーディオルームの工事に痺れを切らした、その金持ちのオーディオ・マニアは、私にこう言い放った。

「金ばかり浪費しやがって。これで十分じゃないか！」

彼は私をお払い箱にし、私は彼と決別したのであった。

結局、どんな機材を用いても、私の理想の音とはならなかった。

私は「所詮は機械だ」と悟ったのである。

それに加えて、私は「デジタル」というヤツが嫌いだ。

私にとってCDの音は不快であり、私の音的美学に反するのだ。デジタル、取り分けCDの音は、薄っぺらいというのか、軽薄というのか、とにかく音と音のつながりが無いのだ。サンプルレートで切り取られている音はそれだけでぶつ切りになる。ぶつ切りになった音が直接聴こえる訳ではないが、音響的に時間経過に伴う残響が妙に気持ち悪いのだ。

それに自慢じゃないが、私の耳は飛びつきり良い。この歳になっても一万六千ヘルツ辺りの音がしつかりと聴こえるのだ。だから、CDの音が高音成分を含んでいないことが嫌でも分かってしまうのだ。

CDを聞いていると高音の伸びがなく、イコライザーでフィルタリングされているようで何とも我慢がならないのだ。

あんなスラスラな音を聞いて「キレイだ」「透明感がある」と言うその心理を、私は全く理解できない。確かにスツキリとした印象はあるが、ダイナミックレンジを削がれた音が果たして「良い」と言えるのだろうか。私にとっては大いに疑問だ。

私は、後にも先にも購入したCDは、娘のために買った「おかあさんといっしょ」の一枚だけである。

四

だから、私が聴くのはいつも「レコード」なのだ。

ピックアップの限界、プリアンプの限界、パワーアンプの限界といった機械のリミットはあるが、それでもなおダイナミックレンジの広さは筆舌し難い。マイクが何処に立てられて、楽団の一人一人の位置が明確に分かるほどの音場を再現した時は、恍惚とした表情を家族の前でも隠せなくなる。そんな私の表情を見て、娘などはこう揶揄するのだ。

「あー、お父さん、またバカになってるう」

アナログ音楽の最高峰、それがレコードだと私は思っている。

確かにレコードの状態を維持するのは容易なことではない。温度変化に弱い、紫外線に弱い、簡単に傷付く、ミクロン単位のみぞに入ったゴミはノイズの原因になる、等々。

私のオーディオルームの壁面の、その後にはレコードが納められている。完全な温度管理を徹底的に行えるように、エアコンディショナーを完備しているほどだ。そこに仕舞われたレコードの枚数は、恐らく十万余枚は下らないだろう。

さすがに、SP盤は持っていないのだが、およそ掻き集めらるだけのレコードを集めたつもりだ。今では放送局からも私のコレクションに対して問合せがあるほどだ。

しかし、一番の不満なのはもうレコードが生産されていないことだ。残念だ、非常に残念なことなのだ。

五

そんな私が愛して止まないレコードなのだが、実はもう一つ不満がある。それは、レコードを再生した時に発生する「ヒスノイズ」だ。

ヒスノイズは、レコードから発生するだけではない。ターンテーブル、アンプ、そしてスピーカーと信号を再生する過程の機械でも発生するのだが、どうしても取り除けないのがレコード自体が持っているノイズである。

それは、レコーディング時にもカッティング時にも発生しているし、レコードの経年変化によってミゾが摩滅することでも発生する。当然、傷が入っても発生する。

私はそれが気に入らないのだが、私もバカじゃない。それを取り除くのは無理だと承知しているので、私のオーディオルームで音楽を聴く時は、最初からそれを頭の中で差し引いて聴くようにしている。

以前の、かなり若かった頃の私は、確かにひどく、それは気が狂わんばかりにヒスノイズが気になって仕方がなかった。それはヒスノイズが無いクリアなアナログサウンドを求めていたからだ。

そのために、ノイズキャンセラーの回路を考案して組み込んだり、低損失の回路や配線、コードを追及してみたり、噂や情報、人から聞いたことで良いと直感で感じたことは思い付くありとあらゆることを試してみた。

だが、行き着いた先は「所詮は機械だ」という想いであり、取り除くことは無理だと納得せざるを得なかったのだ。

しかし、最近は何の意味で「ヒスノイズ」がひどく気になるようになったのだ。

それは定常的なヒスノイズ、常に聞こえるノイズが本当に一定なのだ。つまり、どのレコードを聴いても同じノイズが発生しているように聞こえるのである。

ちょっと考えてみれば解かると思うが、確かに同じオーディオ再生装置を使用しているのだから、定常的に発生するノイズは同じだろう。しかし、レコードのソースが違えば、発生するノイズは微妙に違ってくるはずである。

そうならなければならないはずなのに、ノイズはいつも同じパターンを奏でるのである。

六

ある日のことだ。

いつものように私のオーディオルームでモータルトを聴いていた。いつものように「定常的なヒスノイズ」はシッカリと私の耳に届いていた。

だが、その日のヒスノイズはどこか、何かが違って聴こえたのだ。音量の大小と共に、ピンク系ノイズとホワイト系ノイズとが絡み合っ
って妙な「唸り」のようなモノに聴こえたのだ。

最初のうちは気にならなかったのだが、長時間聴くにつれて耳に付いて離れなくなり、心に妙な圧迫を感じ始めて、思わず音楽の再生を中止してしまったのだ。

それからは、私のオーディオルームでは毎回、その現象に発生するようになった。それはどんなレコードソースでも同じだった。

ベートーヴェン、モーツァルト、ヴィヴァルディ、チャイコフスキー、ブラームス、ヘンデル、ハイドン、メンデルスゾーン、シューベルト、ショパン、リスト、そして、J・S・バッハまで。

私は非常に苦しくて辛かった。私には音楽無しでは暮らしていけないくらい、私にとって音楽を聴くこと、レコードを聴くことは必要不可欠のことだったからだ。

苦しみながらも私は、そのヒスノイズの中で音楽を、レコードを聴き続けていた。聴き続けているうちに、ふと私はこんなことを考え始めたのだ。そのヒスノイズに何か意味があるのではないだろうか。

音量の大小、そしてノイズの音色の変化、何処かで聞いたことのあるような「抑揚」のように感じられるようになってきたのだ。それはまるでヒソヒソ話をしているような、無声音だということに気付いたのだ。

だから、私はこのノイズのことを『ボイス・ノイズ』と名付けたのだ。

しかし残念なことに、私に理解できたのはここまでで、この『ボイス・ノイズ』が何を喋っているかまでは判別することが出来なかったのであった。

七

私はいつものように私のオーディオルームで、いつもの「ボイス・ノイズ」に悩まされながらベートーヴェンを聴いていると、ノックする音が聞こえた。私は返事もせず、ベートーヴェンに聴き入って

いると、ドアが静かに開いた。すると、娘である佐登子が顔をドアから半分突き出した。

「お父さん」

私は、ドアの方を振り返って娘であることを確認してからオーディオチェアから身体を起こして、オーディオの音量を下げた。

「どうしたんだい？」

私は、佐登子に訊ねた。

「お父さんに、私のピアノを聴いてもらいたいの」

娘の佐登子は、自分が弾くピアノの音色や曲の様子を客観的に、私の確かな耳で聴き込んでもらいたいというのだ。

「いいけど、お父さんは音の良し悪ししか解からないよ。譜面が読めないから楽譜のことはサッパリだよ」

私は、佐登子にピアノを聴いて欲しいという時は、いつもそう前置きするのだ。

「お父さんはいつもクラシックを聴いているからそれで十分よ。お父さんはいつもの通りでいいわよ」

そう言って、佐登子は私に微笑んでくれた。

私の娘の佐登子は、高校二年生で音大を目指している。ピアノで大学に入りたいと言うのだ。私の娘の佐登子は、四歳からピアノを始めて、それ以来ピアノを弾き続けている。私や家内が強制している訳ではないが、佐登子自身が自分でピアノに向かい、自らの意思で弾くのに、私自身正直に言って驚いているのだ。

自慢ではないが、佐登子は相当の努力家で、毎日の練習は欠かさない。早朝二時間、学校から帰って四時間、ひたすらに黙々と佐登子はピアノを弾くのだ。ハイドンとベートーヴェンとモーツァルトのピアノソナタ曲はほぼマスターして受験に備えている、といったところだ。

その佐登子のために、私は彼女にグランドピアノを与えた。さすがに”スタンウェイ”という訳にはいかなかったが、それでもボディ寸法二メートルを越える本格的なグランドピアノである。

私は、ピアノの音が好きだ。目の前で奏でられる音楽は、やはりクリアだ。ダイナミックレンジはそのままだし、生楽器の圧倒的な迫力には、オーディオ装置など及びもしないと感じてしまうのだ。奏者が触れる微妙なキータッチで、理論上は同じ音であるにもかかわらず、全然違った音に聴こえてしまうのだ。その不思議さは、オーディオでは味わえない。生の楽器そのものが持つ表現力とでもいうのだろうか、そんな圧倒的なモノを、私はいつも感じてしまうのだった。

九

佐登子に呼ばれて、私はピアノ室へと向った。ピアノ室のドアを開けると、既に佐登子はピアノの前に座っていた。私は、大きく開けられたピアノの屋根の中央から少し離れたところに座った。佐登子は、私が座ったことを確認すると、こう言ってピアノを弾き始めた。

「じゃあ、まずは、モーツアルトのソナタね」

いつも通りの美しいピアノの音色がピアノ室を充滿していった。佐登子もかなり練習していることは、曲の弾き始めを聞いただけで十分に把握できた。モーツアルトの軽快で繊細な音符をほぼトレースしている。微妙な違いは、佐登子自身の奏者としてのアレンジにある、と私は解釈している。

弾き終わって、佐登子はチラリとこちらを見た。

「次は、ハイドンね」

言い終わってから一息、溜息をついてから佐登子は弾き出した。変わらぬ、美しいピアノの音色と響き。だが、私は妙なことに気付き始めた。ピアノという生楽器のはずなのに、なぜかノイズが聞

こえてくるのだ。それはまるで、オーディオのヒスノイズのようだった。佐登子が弾く音からまるで影が遅れて動くようにして聴こえてくるノイズ。

おかしい。実に不可解だ。

そう思いながらピアノの方をふと見ると、佐登子の表情がとても苦しそうな表情でピアノを弾いているのだった。

いつもの佐登子なら、もっと楽しそうはずなのに。やっぱり、どう考えてもおかしい。

私は思わず、座っていた椅子から立ち上がり、ピアノに近づいた。すると、先ほどから聴こえているノイズがピアノに近づくほど、音量が大きくなっていったのだった。

そして、それは私のオーディオルームでいつも聴いている、嫌でも耳に届いて聞こえてしまう「ボイス・ノイズ」そのものであることに、私は気付いたのだった。

十

ピアノに触れると、佐登子が弾いているのにもかかわらず、私の耳には「ボイス・ノイズ」しか聞こえなくなっていた。

更に私は鍵盤の方へと向い、苦しそうな表情なのにそれでも演奏を止めない佐登子に近づき、そして佐登子の肩に手を触れた。

すると佐登子は、鍵盤に突っ伏してしまった。私は突っ伏した佐登子を揺り起こそうと、もう一度佐登子の肩に触れた。

その時だった。

不思議な声が、何処からとも無く聞こえてきたのだ。周りを見回したが、当然何も無かった。

だが、佐登子に触れるとなぜか、明瞭に聞こえたのだった。

「我は司る者なり。我を恐れるな。我を信ぜよ。そして我に従え。されば、望みのままであろう」

不思議な声だったが、恐怖を感じなかった。

どこことなく懐かしい優しさだった。

それでも私は何処か不可解さが拭えないので、凜として尋ねたのだった。

「誰だ、誰なのだ!」

不思議な声は、よどみなく発声した。

「我は司る者なり。そなたは解せる者。そして、彼女は伝える者」

私は全く理解できなかった。だからふと言葉を漏らしてしまったのだった。

「それは何を意味することなのだろうか?」

それでも不思議な声は、私の疑問に答えるかのように静かに柔らかく発声した。

「我の……を」

ドキュメンタリー

一

「昼食、買ってきたわよ。今日はサンドイッチにしたわ」

あたしはアトリエのドアを開けて、レジスタに声を掛けた。

「うん、分かったよ。もう少しでコーディングが終わるから、ちょっと待ってて」

レジスタは、声を掛けたあたしの方を振り向きもせず、高速でキーボードをタイピングしつつ、視線はモニタを食い入るように注視していた。

あたしはレジスタの返事を聞くとすぐにドアを閉めて、キッチンへと向った。

レジスタがコーディングしている時は、何を言っても無駄だった。レジスタは確かに受け応えをしてくれるのだが、それは「反射行動」と同じで、彼の思考を通じて出てくる彼の意思ではないからだ。

あたしは「あとでもう一度、レジスタに声を掛けなきゃ」と思いつつ、キッチンのケトルに水を入れ始めたのだった。

二

今のあたしは、レジスタに完全密着の取材をしている。

朝、レジスタが朝食を摂る前からレジスタのアトリエを訪問し、レジスタが眠りにつく直前にアトリエから退出する。その間、レジスタの様子をビデオ撮影やスチール撮影をしたり、レジスタが制作していない時にはインタビューをして、レジスタの取材をしている。しかしそれは、レジスタがアトリエで制作していたり思索していたりする時のことであって「アトリエを訪問する」「アトリエを退出する」と言いながら、あたしは同じ建物の一室をレジスタから借

り受け、そこで生活しているのだ。だから、もっと平たく言うところと一緒に暮らしている」と言っても過言ではない。つまり、一種の『同棲生活』のようなカタチである。

「レジスタが朝食を摂る前から」というのは、あたしがレジスタの朝食を用意しているからであり、また「レジスタが眠りにつく直前に」とは、レジスタの夕食を用意し、食事が済んだレジスタにシヤワーを浴びさせて眠りにつけてから、あたしは自室に戻るという訳なのだ。

こんなカタチでレジスタの取材をすることになったのは、レジスタが作った、あの「告白」の作品に起因する。あのスキャンダルから、あたしはレジスタのアトリエから離れられなくなり、出られなくなっただけだ。

三

あの雷雨の翌日、あたしはどうかこうかに会社に出社することが出来たのだが、会社はあたしに対して非情だった。出社するとすぐにプロデューサーに呼ばれた。

プロデューサーの個室をノックして入ると、プロデューサーは、只でさえ気難しい顔を更に厳しい表情にしてデスクに座っていた。

茶色のスーツに黄緑色のベストを着て、薄くはないが白いものかなり混じった頭を掻きむしり、あたしを立たせたままプロデューサーはこう言った。

「アンナ、僕は君を信じていたんだよ。君にはずい分と期待をしていたんだ。だけど、プロセスでこれではなあ」

プロデューサーは自分のデスクから立ち上がって、あたしの目の前に歩み寄った。

「僕もかばい切れないんだよなあ、実際」

そう言っただけでプロデューサーは、右手で頭を抱えた。

「申し訳ありません、ボス」

あたしはそう言うしかなかった。

「僕としては、君の企画は素晴らしいと思っている。だから『契約』というカタチでどうだろうか」

あたしは、ハツとしてプロデューサーの顔を、そして目を睨み付けた。あたしは悟ったのだ、プロデューサーの言葉は「辞職しろ」と同義だということを。

プロデューサーはそれを察知したのか、コホンと咳払いをしてから、あたしをなだめるように優しい表情になってあたしに言った。

「僕だって君が残れるように努力したんだ。その結果の『契約社員』なんだ。アンナのこの素晴らしい企画を是非とも成功させれば、今以上のポジションで復職することはそんなに難しい話じゃない」

バツが悪くなったプロデューサーは、再び自分のデスクに座り、窓の方へと椅子を回転させた。プロデューサーのその様子をジッと観察していたあたしは複雑な想いだったが、あたしはなぜか納得していた。

「分かりました」

あたしがこう答えると、プロデューサーは急にあたしの方に椅子の向きを変えた。

「アンナ、君なら解かってくれると思っていたよ。いやあ、さすがだ」

そう話し掛けるプロデューサーに対して、あたしは上目遣いにこう言った。

「ボス、二つほどお願いがあるのですが」

小躍りしたプロデューサーの顔が少しだけ曇った。

「何だね？」

あたしは少しイジワルな顔をして言った。

「取材機材の提供と、制作したドキュメンタリーの全ての権利はあたしにあるって……」

プロデューサーは間髪を入れずに厳しい表情で答えた。

「機材は無理だ」

そう言い終わると、次は柔和な顔になった。

「だが、著作権その他諸々の権利は当然、アンナ、君自身のものさ。君自身が君自身で君一人で作るんだから、それは当然さ」

あたしは鼻でフンと笑った。

「そういうことなんですね。解かりました。それでは失礼します」

あたしは、プロデューサーが何か言っているのを無視して、プロデューサーの個室を出て、自分のデスクに赴き、私物をダンボール箱に詰めて、同僚との挨拶もそこそこに会社を退出したのだった。

後日、引き払ったマンションの管理人から転送されてきたのはプロデューサーからの手紙で、その手紙の文面にはキツチリと『解雇』の文字が書かれていた。

四

只でさえ有名な「レジスタ」というアーティストと衝撃的なスキヤンダルを起こしたメディア関係者の端くれとしてのバッシングは、ドキュメンタリーの制作を阻害する要因として十分ではあったし、そして「フリー」になったことによるあたし個人に対する風当たりは益々強くなったのは確かだ。

だが、あたしから言わせてもらえば、あたし自身が自由になった分、あたし自身が責任を負う分、あたしも自由な発言や自由な行動が出来るようになった。

だから、あたしは今だにレジスタのドキュメンタリーの制作を続けている。

安い機材ながらもレジスタのアトリエに数台のビデオカムを設置してレジスタの様子を撮り、簡易なビデオ編集ソフトでレジスタの映像を編集し、レジスタの本質に迫るべく彼へのインタビューも欠かしていない。

もっとも最近のレジスタとのインタビューは、インタビューというよりも生活の中の日常会話が多くなってきたことも事実な

のだが、そんなレジスタの生活部分も大切な取材対象であることに違いない。

強制的ではあったが「フリー」という立場になった分、あたしの思うままに、何の制約も無くドキュメンタリーを制作できるのは、あたしにとってはある意味で理想とも言える状況だ。

逆転的発想をすれば、何をするにもあたし自身の責任の下で何でも出来るようになったから、こうしてレジスタとの奇妙な同棲生活が可能になったのだ。

もっとも、以前に住んでいたマンションを引き払わざるを得なくて、レジスタのアトリエに転がり込んだというのが正直なところだ。「フリー」といえば聞こえはいいが、要するに自由業だ。つまり収入が無いということだ。以前のようなマンションの家賃など払える状況ではなくなったのだ。

あたしはレジスタの収入に頼るという存在に成り下がってしまったが、レジスタにはレジスタで問題を抱えていたのだった。

五

それは、レジスタ自身にはレジスタを管理する人間がいなかったことだ。

レジスタ自身は芸術を創出することだけしか出来ないアーティストバカではない。レジスタ自身にもそれなりに生活感や生活行動を持っている。しかし、それはそれだけのことであって、仕事の注文を受注することや仕事の打ち合せ、仕事の納品などをこなせるほどの社会経験を持ち合わせていなかった。

今までレジスタにそういう存在がいなかったこと自体が実に不思議なことなのだが、それはどうやらあの『不思議な声』が成したことなのかもしれない。

あたしは、その役目も負うしかなかった。

もちろん、あたしにはそういった経験が山ほどある。あたしはそ

ういう職種で働いてきたからだ。確かに「打って付け」であると言えるだろう。

あたしは首尾よく打ち合わせをして、レジスタのために制作指示を書いて、そしてレジスタが制作し納品するというパターンが出来上がったのは、あたしがレジスタのアトリエに転がり込んでからすぐのことだった。

そのせいかどうかは判らないが、大手企業からのCM映像のオフアーが時々舞い込むようになった。おかげでレジスタとあたしは、結構な収入を得ることが出来るようになっていったのだった。

六

あの『不思議な声』はスキャンダルが起こったあの雷雨の日以降は、音沙汰が無い。レジスタ自身もあれ以来声を聞いていないというし、あたしもレジスタに触れても何の反応もなかった。

あの『不思議な声』について、あたしは卵のサンドイッチを頬張りながらレジスタに訊いてみた。

「あの時あたしにも聞こえた『不思議な声』って、以前から聞いていたの？」

レジスタは、左手になみなみとコーヒーを注いだマグカップを持ち、右手に生ハムとレタスをこれでもかと挟んだサンドイッチを持って、あたしの顔を見た。

「うん、そうだよ」

あまりにもアツケラカンとした答えにあたしの顔は多少引きつりながら、次の質問をした。

「どのくらい前から？」

レジスタは、はみ出た生ハムとレタスに苦戦しながら答えた。

「ずーっと前から。うーんと……そう、絵を描くようになってすくなかな」

あたしは、思わずなるほどとうなずいてしまった。

「それはコンピュータで描き始めた時なの？」

レジスタは、コーヒーをガブガブと飲んでから答えた。

「うっん、まだ絵の具で絵を描いていた時だよ」

あたしは「おや？」と思った。

「じゃあ、まだご両親が健在だった時ね」

レジスタはトマトとキュウリのサンドイッチに手を伸ばそうとしたが、あたしの質問でピタリと動きを止めてあたしを見た。

「そのすぐ後に両親が失踪しちゃったんだ」

あたしは、ちよつとバツが悪くなった。

「そうなの。ごめんなさい、変なこと言っちゃって」

あたしを見ていたレジスタは、ニツコリ笑った。

「いいんだよ、もう昔のことだから」

そう言つてレジスタはあたしに向つてニツと笑つてから、レジスタはトマトとキュウリのサンドイッチにかぶりついた。

そんなレジスタに、あたしは身を乗り出して更に質問をぶつけた。
「ね、ねえ。それで両親がいなくなつてから、あなたはどうしたの？ どうやって暮らしていたの？」

レジスタはサンドイッチをコーヒーで流し込んでから答えてくれた。

「おじさんがね、僕にコンピュータをプレゼントしてくれたんだ」
レジスタはマグカップをあたしに差し出して、コーヒーのお替りを催促した。

「それを使うようになってから、僕は作品を作るようになったんだ」
あたしが手渡ししたマグカップをそのまま口元へ運んだ。

「作品を作り続けていたら、いつの間にか僕の手元にお金が入ってくるようになったんだ」

あたしは、更に身を乗り出した。

「その？おじさん？つて誰なの？ 親戚の方なのかな？ 知ってる人なの？」

レジスタは満足気な顔をして、テーブルにマグカップを置いた。

「うん、親戚のおじさんらしいんだけど、僕はそのおじさんの顔を見たことがないし、名前も知らないんだ」

あたしはレジスタの顔を覗き込み、目を見据えてこう訊いた。

「今の話はホントなの？ 間違いはないの？」

レジスタは、あたしの詰め寄り方に臆したのか、急にオドオドして椅子の背もたれいっぱい身を引いた。

「間違い無いってば。僕、嘘なんか言っていないよ」

あたしは、何か拍子抜けした感じで、乗り出した身体をストンと椅子に戻した。

レジスタに訊いても無しの礫だとは判ってはいたけれど、あたしは訊かずにはいられなかった。やっぱり、予想通り、要領を得ない話に終始してしまった。それでも「得体の知れない？ おじさん？」のことや「コンピュータを贈られたこと」とか「作品を作り始めたら途端に収入が発生したこと」など、断片的にはあるが得るものはあっただけマシと思うことで、あたしは納得した。

あたしは『不思議な声』についての質問に戻した。

「あの『不思議な声』は、レジスタにとって何なのかしら？」

レジスタは、平然と答えた。

「僕の創作を手伝ってくれる、そしていろんなことを教えてくれる、大切な存在だな。でも、友達とか仲間とはちよつと違う存在だけだね」

レジスタにとって『不思議な声』は意外なくらい身近な存在なのだということを知った。

そして、レジスタはこんなことも漏らした。

「僕は、あの『不思議な声』のことを『Dマスター』って呼んでいるんだ」と。

「それ、どういう意味なの？」

あたしは、素朴に質問をレジスタにぶつけてみた。

「僕が『何て呼んだらいいか？』って訊いたら『Dマスター』でも呼んでくれ』って言ったんだ」

あたしは首を振りながら、訊き直した。

「そうじゃなくて、どうしてそんな名前なのかってことよ」

レジスタの視線がしばらく宙をさまよっていたが、すぐにあたしの顔を見てこう言った。

「そのことについては、僕には解からないなあ」

今のあたしにとつて『不思議な声』は結局、皆目見当をつかないモノでしかないという点に終息したのだった。

七

ある日の朝、食事が終わってから、あたしはレジスタにこう言った。

「あたしは今日、自分の部屋で仕事をするから取材はしないわよ」
するとレジスタは呆然とした表情をした。

「え、そうなの……」

あたしは優しい表情でレジスタに微笑んだ。

「今日は、レジスタの好きなことをやってもいいわよ」

すると、レジスタは空かさずあたしに切り返してきた。

「それじゃあ、アンナが仕事してるところを見たいな」

あたしは少し困惑した。あたしは人が何かをしているシーンをカメラに収めることはあっても、あたし自身の仕事姿を人に見られるということを意識したことが無かったから。

「ダメなの？」

レジスタは悲しい表情であたしを見つめた。

あたしは少し迷って眉を寄せたが、少し考えてから笑顔でこう答えた。

「仕方ないわね。いいわよ、あたしの仕事を見ても」

あたしがそう言つと、レジスタは嬉しさの余りにコーヒークップを倒しそうになった。

「ただし、くれぐれも邪魔はしないでよ、いい？」

それを聞いたレジスタは、無邪気な幼児のようにうなずいた。レジスタは”あたしの仕事”に興味津々の様子だった。

朝食の後片付けをするあたしをイライラしながらずっと待っていたレジスタは、あたしがエプロンを外してキッチンの椅子に引っ掛けたのを見届けると、キッチンのドアを開けてくれた。

「ありがとう」

あたしがそう言うと、レジスタは得意げにうなずいてあたしの後をついて来た。あたしは自分の部屋のドアを開けてレジスタを招き入れた。

「さ、どうぞ。スツールにでも座ってて」

レジスタはそそくさとスツールに座っている間に、あたしはコンピュータのスイッチを入れて起動させた。

前のマンションには？PT？パーソナルターミナルがあつたが、レジスタのアトリエで

あるこの建物は少々古い一軒屋のせいで、高速回線にはつながっていないけれどもPTの設備が施されていない。もっとも、このレジスタには、高度でパーソナルなインプットシステムは必要ないのだからうけれど。

あたしは、コンピュータが置かれているデスクに座り、まずはメールのチェックをした。メールをチェックしているあたしの後ろで、スツールに座っているレジスタがあたしのすることにワクワクしている視線をヒシヒシと感じていた。

メールは、相変わらずあたしに対する誹謗中傷の内容が多い。もちろん、内容を読む前にメールソフトが弾いてしまうのだが。

「ひどい見出しのメールが多いんだね。ちよつと悲しいよ」

レジスタはいつの間にか、あたしの肩越しにモニタを覗いていたのだった。

「大丈夫よ。『スパムメール』と言って読む前にちゃんと処理してしまうから」

あたしがそう言うと、レジスタはちよつと悲しい顔をした。

「アンナは読まないんだ。せつかく書いてくれたのに……」

あたしは振り返ってレジスタに言った。

「読んでも気持ちが荒むのがオチよ。読まない方がいいわ」

レジスタは、ふーんと言っただけで、またスツールに座った。

メール処理が終わった後に、映像が入ったメモリデバイスをプラグインして、レジスタの映った映像や画像をコンピュータに転送した。そしてビデオ編集ソフトを立ち上げて映像をチェックしつつ、シーンのカット&ペーストを始めた。

この段階になると、レジスタはあたしの横にスツールを移動させて、モニタを食い入るように見つめ始めた。あたしは、そんなレジスタを横目で見て微笑ましく感じていた。

「面白い？」

あたしはレジスタに訊いてみた。

レジスタはあたしのコンピュータのモニタから視線を外さないで答えた。

「うん、とつても。こんなにリアルな映像を切り貼り出来るなんて何て素敵なんだ。しかも目の前でだよ」

レジスタの目はキラキラと輝いていた。

「あら、あなたの映像の方が百倍も素敵よ。こんな映像は俗物ではないわ」

あたしは、謙遜でなく本当にそう思っていた。

「いや、これは僕の持っていないモノだよ、うん。面白過ぎるよ、これは！」

そんなことを言うてくれるレジスタに、あたしは顔を赤くしていた。

もつともレジスタは、あたしの編集ソースや編集方針より、映像を編集するソフトや映像データに興味があるようだったが。

八

それから、あたしが仕事をする度に、レジスタは必ずあたしの

仕事を見学するようになった。

「いつ見ても、面白いなあ」

あたしが映像を編集してドキュメンタリーを作る様子を食い入るように見つめて、レジスタはいつもこう呟くのだった。

だが、その日のレジスタはちよつと様子が違っていた。いつになく真顔であたしの編集しているドキュメンタリーの画面を見ていた。「アンナ、この映像作品はなんていう種類なの？」

レジスタは静かに質問した。

「え？ これ？ これはね、ドキュメンタリーっていう種類の作品。ジャンルはノンフィクションかしら」

あたしは気恥ずかしげに答えた。

「それで、このドキュメンタリーの内容は何なの？」
相変わらず、レジスタは淡々と質問してきた。

いつもはあたしが質問する立場なのに、今日はレジスタに質問され続けていた。

「当然、レジスタ、あなたのドキュメンタリーよ。これはあたしが企画した作品なのよ」

レジスタは、更に質問をしてきた。

「それで、出来上がったならこれをどうするの？ 制作会社に売るのが？ 放送局に売るのが？」

あたしは、レジスタの意外な質問にビックリした。

「意外とリアルな質問をするのね」

あたしはそう言うてから、ひと呼吸を入れた。

「もちろん、映像ソフトとして売ってお金を儲けることも必要だけど、この映像ソフトを多くの人に見てもらって、レジスタ、あなた自身をみんなに知ってもらいたいのが一番ね。そして、出来るならあたしも映像制作者として認めてもらいたいっていうのもあるわ」

あたしは、こんなことを今更ながら口にしたことに気恥ずかしさを感じていた。

「ふーん」

レジスタは、そう言ったきり頭を抱えて黙っていた。

あたしは、考え込むレジスタに気付かないフリをして仕事に没頭しようとした。

やがて、レジスタは頭を上げてこう言った。

「ねえ、アンナ。『Dマスター』がアンナと僕がコラボレーションすればいい、って言うてる」

あたしはコンピュータを操作する手を完全に止めた。

「何ですって！『Dマスター』ですって！」

あたしは、すぐにレジスタに触れた。

「解せる者よ、我に従え。そして伝える者に託せ」

『Dマスター』は二回、この言葉を繰り返して二度と声はしなくなつた。

「どういうこと？」

あたしは、サッパリ理解出来なかつた。

「僕のコンピュータにこの映像のソフトをインストールしてよ」

レジスタは晴れ晴れとした顔であたしを見つめていた。

「え、でも、あなたのコンピュータでは使えないんじゃない……」

あたしは困惑していた。

「大丈夫だよ。『Dマスター』が使い方教えてくれた。それに多くの人に観てもらいたいというアンナの要望も達成できるよ」

あたしは、今だにキツネに化かされた気分だった。

「え、なに、はあ、どういうこと？」

レジスタはあたしの肩に手を掛けて、満面の笑みであたしに話しかけた。

「任せてよ」

九

あたしは、レジスタに言われるままに、レジスタのコンピュータにビデオ編集ソフトをインストールした。この時ばかりは、レジス

タのコンピュータにマウスやメモリデバイスが繋がれた。

インストールが完了して一旦電源を切り、インストールのためにつけたデバイスを一切取り外してしまってから、再度電源を入れた。

すると、レジスタがいつも使っている画面が立ち上がった。そこには先ほどのソフトを入れたという痕跡を全く感じる事が出来なかった。

「それじゃあ、アンナが編集したドキュメンタリーのデータを転送するよ。データが入ったメモリデバイスを貸して」

あたしは、あたしが編集したドキュメンタリーの映像データが入っているメモリデバイスをレジスタに手渡した。レジスタが転送すると、一瞬その映像が断片的に流れて、そして編集ソフトのコントロール部分だけがモニタに現れた。

その間、レジスタは相変わらず、いつもの通りにキーボードをひたすら高速に叩き続けていた。いつもより短い時間でコーディングを終えたようで、すぐにレジスタはあたしの方に振り返った。

「素晴らしいよ、アンナ。こんなに長い時間の作品なのに、あつという間にコーディングできたのは、アンナの映像が素晴らしいからだよ」

あたしは、レジスタに言われてちよつと赤くなった。

「ありがと。褒めてくれて」

レジスタは、続けてこう言った。

「もう、既に配信したからね」

あたしはビックリした。

「え？ それってどういうこと？」

レジスタはあたしに微笑んだ。

「多くの人に見てもらいたいでしょ？ だから僕のチャンネルに流した。そして、お金も欲しいからスポンサーを付けて放送局に放送権を貸したよ。それからアンナも有名になって欲しいから、ドキュメンタリー・ビエンナーレに出品しておいたよ」

レジスタの言葉にあたしは舌を巻くばかりだった。
「ただね、僕とのコラボレーションだけどね」
そう言ってレジスタはあたしにウィンクした。

十

「グランプリを受賞できるとは思っていませんでした。もちろん、あたしよりもレジスタが頑張ってくれたので。本当にありがとうございました」

あたしは、ドキュメンタリー・ビエンナーレの授賞式でこんな風にコメントした。

「僕は映像を加工しただけです。ほとんどはアンナ・D・ショーが制作したものです。彼女とコラボレーション出来たことを、僕は嬉しく思っています」

これがレジスタのスピーチだった。あたしよりもレジスタの方が凄いはずなのにそんなに謙遜をして、とあたしは思ったのだった。

あたしとレジスタは、授賞式のために東京・ジャパンに来ていたこのドキュメンタリー・ビエンナーレは、日本の自動車メーカーが主催のコンテストだったのだ。今や日本は映像文化は、一時期の『アニメーション』を凌ぐ勢いで世界を席卷しているのだ。

そんな日本で後学のために日本での滞在を有意義にしようと企てたことが、後にレジスタとあたしが日本でしばらくの間、滞在すること余儀なくさせられる事態に陥っていくことに、今はまだ気付いていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6088q/>

デジタルアン

2011年4月10日20時55分発行